



シリーズ

# 多文化共生を語ろう！

今回から、シリーズ「多文化共生を語ろう！」と題して、協会でセミナーなどの講師を務めていただいている有識者の方々に多文化共生についてご寄稿いただきます。

第1回は、3月2日に「多文化共生ステップアップセミナー」でも講師をお願いした埼玉大学の石戸教授にお願しました。

## 「多文化社会」とは？

埼玉大学教育学部教授 石戸 教嗣

「多文化」という言葉が日本社会で使われだしたのは、今から約25年前である。冒頭から数字を出して恐縮だが、新聞記事(朝日・毎日・読売新聞)の検索をしてみると、その語の浸透は、つぎの3つの段階に区分できる。

第Ⅰ期:1987～1994年(年平均の使用頻度 26件)

第Ⅱ期:1995年～2004年(247件)

第Ⅲ期:2005年～ (367件)

これによると、「多文化」という言葉は、だいたい1日に1回くらいどこかで見たり、聞いたりされるまでに、われわれの生活に浸透してきている。

ここで詳しく論じるだけの余裕はないが、各時期はおおよそつぎのような特徴づけができる。

第Ⅰ期:欧米における多文化主義の高まりとその紹介

第Ⅱ期:新自由主義・グローバル化の流れとその転換

第Ⅲ期:中国を初めとするアジア・新興国の経済成長による交流の活発化

このような変化は、日本社会の「多文化」化が、理念的な次元から、政治・経済的な次元へ、またさらに、生活それ自体の次元へと深化してきていることを示している。

今年で5年目を迎える、埼玉大学教育学部と埼玉県国際交流協会が共催し、市民アドバイザーの方の協力を得て行っている「多文化共生広場」(外国につながりをもつ子どもへの学習支援教室)の活動も、子どもを学力面だけでなく、その生活全体においてとらえようとしている。そこで出会ってきた子どもたちは実に多様な面を見せてくれている。彼らが困難を抱えながらも、前向きに生きていこうとする姿に、その活動に参加する大学生たちが励まされている。子どもが抱える問題のあまり

の深刻さにたじろぐこともあるが、子どもたちが示すひたむきさ・開放性は、日本人が見習わないといけないものである。

ありきたりの言い方かもしれないが、文化を異にする者どうしが「普通」の市民として互いに付き合い、理解し、互いの良い点を引き出していくことが「多文化」社会の姿ということになるのではないだろうか。

このシリーズを通じて埼玉県における「多文化」化の多様な面が取り上げられるのを期待したい。



「多文化共生ステップアップセミナー」で講義をする石戸教授



「多文化共生広場」の様子